

『元朝秘史』モンゴル語の人称代名詞属格形と譲渡可能性

山越康裕 (AA 研) yamakoshi@aa.tufs.ac.jp

0. 概要

<疑問> ハムニガン・モンゴル語 (以下、ハ・モ語) における譲渡可能性による形式の使い分けは

- A. 古い時代のモンゴル語にもともと存在し、ハ・モ語にのみ、それが保持された
- B. 古い時代のモンゴル語にはなく、ハ・モ語のみがその機能を獲得した どちらか?

※中期モンゴル語における人称代名詞属格形が「所有者」として他の名詞 (=被所有者) と名詞句を構成するケースにおいて、譲渡可能性の区別があるのかどうか分析を試みる。

<結論>

- 1) 『元朝秘史』が著された中期モンゴル語 (以下、『秘史』モンゴル語) においては現在のハムニガン・モンゴル語のような相補的な使い分けや「一致」のような現象は確認されない
- 2) 代名詞属格形後行型は譲渡不可能物に対して用いられやすい傾向がある。3 人称の二重標示型はその傾向がさらに強い
- 3) 所有人称小詞の使い分けによる譲渡可能性の区別はおそらく古い時代のモンゴル語にはなく、属格形後行型が付属語化していく過程で生じたと推測される。それが他のモンゴル諸語にも残っていたかはわからないが、ハ・モ語においては (ハムニガン・) エヴェンキ語の影響で厳密に区別されるようになったと考えられる

1. はじめに

譲渡可能性 (alienability)

(1) ナーナイ語

- | | | |
|----------------|------------------------|----------------|
| a. naj dili-ni | b. dili- ŋo -si | |
| 人 頭-3POSS | 頭-ALIEN-2SG:POSS | |
| 「人の頭」 | 「君の持っている (獣の) 頭」 | (津曲 1992: 267) |

モンゴル諸語の場合、『所有者』の『被所有者』という関係は下記 a ~ c の 3 パターンの構造いずれかであらわされる (D(ependent)=所有者; H(ead)=被所有者)。

- a. D-GEN H (従属部標示型) = 以下、D 型
- b. H=POSS (主要部標示型。ただし、このとき D はあらわれない) = 以下、H' 型
- c. D-GEN H=POSS (二重標示型) = 以下、DH 型

1.1 現代モンゴル語の場合

- | | | | |
|-----------------|-------------------|-------------------------------|-----------------------------|
| (2) Mon. a. D 型 | b. H' 型 | c. DH 型 | c' DH 型? |
| čini eež | eež = čin' | čini eež = čin' | čini eež = n' |
| 2SG:GEN 母 | 母 =2SG:POSS | 2SG:GEN 母 =2SG:POSS | 2SG:GEN 母 =3:POSS |
| (訳は全て) 「君の母ちゃん」 | | | |

⇒ 譲渡可能性による使い分けとはいえないさそう

⇒ DH型における所有人称小詞は「所有者」をあらわしているとはいえない＝(2c')

1.2 ハムニガン・モンゴル語の場合

モンゴル諸語のうち、譲渡可能性の区別があると考えられる言語として、ハ・モ語がある。ハ・モ語、ブリヤート語、モンゴル語それぞれの所有構造における所有者と被所有者の関係を分析した Yamakoshi (2012) では、以下の点を指摘。

(3) <i>KhM.</i> a. D 型	b. H' 型	c. DH 型 (←(2c') のような「不一致」はない)
<i>minii</i> dǎbtər	tarikin = <i>mini</i>	<i>minii</i> akaa = <i>mini</i>
1SG:GEN ノート	頭 =1SG:POSS	1SG:GEN 兄 =1SG:POSS
「私のノート」	「私の頭」	「私の兄」 (山越 2010: 106)

- 1) 所有人称小詞を伴わない D 型の使用頻度が低く、H' 型・DH 型がおもに用いられる
- 2) 使用頻度の低い D 型における「被所有者」に比べ、H' 型・DH 型の「被所有者」のほうが譲渡不可能物であることが多い
- 3) H' 型・DH 型では、とくに「所有者」が人である場合、「被所有者」は角田 (1992: 119), Tsunoda (1995: 576) が提案する「所有傾斜 (possession cline)」において上位に位置する語彙 (身体部位、身体属性、衣服、親族名称) である「譲渡不可能物」に限られる
- 4) 「所有者」が人である場合に譲渡可能性の有無が関与するという 3) の特徴は、Sunik (1947), 風間 (2001) らが指摘するエヴェンキ語などツングース諸語の譲渡可能接辞の用法と共通する
⇒ブリヤート語、モンゴル語にはそのような明確な使い分けなし。
⇒ツングース語族・エヴェンキ語 (譲渡可能接辞による区別あり) の一方言であるハムニガン・エヴェンキ語 (譲渡可能接辞は消失／属格形あり) の「影響」 (以上、Yamakoshi2012)

※ハムニガン・モンゴル語：ロシア連邦ザバイカリエ地方、中国内蒙古自治区フルンボイル市などで、自称カムニガン *kamnigan* (モンゴルからの他称ハムニガン／トウングース *xamnigan* / *tunguus*) の人々によって使用。「ブリヤート語ハムニガン方言」とされることもかつてあったが、現在では別言語とみなす見方が優勢。ツングース諸語のハムニガン・エヴェンキ語 (またはエヴェンキ語ハムニガン方言) も母語としており、中国在住のハムニガンの人々は民族識別工作においては「鄂温克 (エウエンク) 族」に帰属。また、ハムニガン・モンゴル語は 13～15 世紀初頭の中期 (東部) モンゴル語の形態・音韻的特徴を保持している (Janhunen 2003: 85) という指摘もある。なお、ハムニガン・エヴェンキ語は (ハムニガン・) モンゴル語の影響により、属格の獲得／譲渡可能接辞の消失がおこったと推測されている (Janhunen 1991)

※所有傾斜：Tsunoda (1995: 576) による。「身体部位>身体属性>衣服>親族>愛玩動物>作品>それ以外」という階層性。上位のものほどより譲渡不可能とされる。なお、通言語的に身体部位、衣服、親族、家畜などが譲渡不可能物として考えられることは Nichols (1988) も指摘している。

2. 『秘史』モンゴル語の所有構造のパターン

分析対象とするテキスト：四部叢刊影印本『元朝秘史』 (付録 1)

- ・13 世紀の中期東部モンゴル語を 14 世紀末の漢語で音写したものと見る見解が有力 (e.g. 小林 1954: 223、小澤 1994: 226)¹。多くの転写本のうち、Ligeti (1971) によるローマ字転写テキストをもとに分

¹ 『秘史』のもととなったウイグル式モンゴル文字による原典 (現存せず) の成立年代には諸説あるが、小澤 (1994: 94, 125) 2 / 12

析、索引を付した栗林・确精扎布編 (2001) を用いる²。

『秘史』モンゴル語における所有構造：3 パターン

- a. [D-GEN#H] (4) ⇒所有者属格形先行型
 b. [H#D(PERS)-GEN] (5) ⇒所有者属格形後行型 (D が人称代名詞の場合のみ)
 c. [D-GEN#H#D(PERS)-GEN] (6) ⇒属格形二重型 (D がもっぱら第三者／人称代名詞以外の場合)

(4) 先行型

min-u ulus Altan Qučar qoyar ken-e ber ülü mede'ül-kün büy-yü je.
 1SG-GEN民人 PSN PSN 二 誰-LOC も NEG 知らせる-VN.FUT.PL COP-DED.PRS MDL

「わが民人はアルタン、クチャル二人のいずれにても治めさせまじきものぞ (上: 238) 」

[§180. 06:38:10-06:39:01]

(5) 後行型

edö'e ene šingqor atqu-ju abčira-ju qar-tur min-u tu'u-ba.
 今 この 海東青 掴む-CVB.IPFV 持つてくる-CVB.IPFV 手-DAT 私-GEN 留まる-PST

「今、この海青 (おおたか) の掴みもち来たりて、わが手にとまれり (上: 39) 」 [§63. 01:43:08-09]

(6) 二重型

Otčigin *Teb tenggeri-yin jaqa in-u* bari-ju....
 PSN PSN-GEN 襟 3SG-GEN 掴む-CVB.IPFV

「オドチギンは、テブ・テンゲリの襟を掴み... (下: 146) 」 [§245. 10:38:06-07]

◎現在のモンゴル諸語にみられる所有人称小詞

⇒中期モンゴル語において人称代名詞属格形であったものが文法化・付属語化したもの (e.g. 一ノ瀬 1988: 17, Rybatzki 2003: 71-72)。

一ノ瀬 (1988) : 人称代名詞属格形のうち、「被所有者」名詞に先行した形式 (および、属格形に -ai ~ -ei 「~のもの」が接続した「物主代名詞」) が現代モンゴル語諸方言の人称代名詞属格形に、「被所有者」名詞に後続した形式が所有人称小詞になった (図 1) 。

*minugai > ① **minu'ai** > minī (人称代名詞属格形 [1])

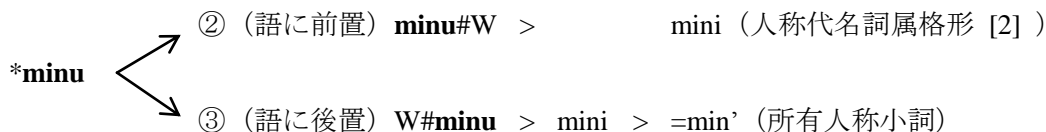
*minu 

図 1. 一ノ瀬 (1988: 21) による推測 (1 人称単数属格形・物主代名詞の例。一部改変)

この仮説を支持すれば『秘史』モンゴル語と現代のモンゴル諸語との所有構造の対応は次のようになる。

は 13 世紀にモンゴル語東部方言によって書かれたと推定している。他の研究者もおおむね 13 世紀～14 世紀初頭という主張をなしており、Rybatzki (2003) らが定義する中期モンゴル語の時代に合致する。

² 用例に付した番号 [§a. bb:cc:dd] は、『秘史』の節番号 (第 a 節) および栗林・确精扎布編 (2001) のレコードとして付されている番号 [卷 bb: 丁 cc: 行 dd] に対応する。また『秘史』や Ligeti (1971) は文の切れ目を示していないため、「文」の区切りも栗林・确精扎布編 (2001) に準ずる。ただし栗林・确精扎布編 (ibid.) は形態素境界に用いる記号が一般的なもの (e.g. Leipzig Glossing Rules) とは異なるため、原則 Leipzig Glossing Rules に即した形で形態素境界を改めた。和訳は小澤訳 (1997a, b) に基づき、小澤訳 (1997a) からの引用は (上: xx)、小澤訳 (1997b) からの引用は (下: xx) と和訳末尾に掲載頁を示す。

『秘史モンゴル語』	⇔	現代のモンゴル諸語
先行型 (D 有標)	⇔	D 型 (D 有標)
後行型 (D 有標?)	⇔	H' 型 (H 有標)
二重型 (双方有標? 後述)	⇔	DH 型 (双方有標)

Ićinose (1988: 41-42) の指摘：

この先行型／後行型の使い分けには情報構造が関与しており、誰が「所有者」であるのかを聞き手が把握している場合には「被所有者」の後 (=後行型) に、「所有者」を聞き手が把握していない場合や、聞き手が知っていても強調したい場合には「被所有者」の前に人称代名詞属格形が置かれる (=先行型)。

⇒⇒情報構造だけでは説明できない例もある。

4. 使用例と分布

表 1. 『秘史』モンゴル語の人称代名詞属格形および物主代名詞

	SG	PL		SG.PP	PL.PP	
1st	min-u	man-u (EXCL)	bidan-u (INCL)	min-u'ai	man-u'ai	bidan-u'ai
2nd	č̣in-u	tan-u		—	—	
3rd	in-u	an-u		—	—	

表 2. 『秘史』モンゴル語における人称代名詞属格形の出現数と被所有者 (H) との関係

	先行型	後行型	二重型	H なし	計
1SG (<i>min-u</i>)	35(+10)	163(+13)	0	0	198(+23)
1SG.PP (<i>min-u'ai</i>)	1	0	0	0	1
1PL.EXCL (<i>man-u</i>)	0	10(+1)	0	0	10(+1)
1PL.EXCL.PP (<i>man-u'ai</i>)	0	0	0	0(+1)	0(+1)
1PL.INCL (<i>bidan-u</i>)	32(+6)	26(+2)	0	0(+1)	58(+9)
1PL.INCL.PP (<i>bidan-u'ai</i>)	0	0	0	0(+6)	0(+6)
2SG (<i>č̣in-u</i>)	4(+3)	83(+7)	1	0	88(+10)
2PL (<i>tan-u</i>)	2(+1)	13(+3)	0	0	15(+4)
3SG (<i>in-u</i>)	3(+3)	172(+12)	31(+4)	0	206(+19)
3PL (<i>an-u</i>)	3(+2)	50(+5)	4	0	57(+7)
総計	80(+25)	517(+43)	36(+4)	0(+8)	633(+80)

分析から除外 (表 2 のカッコに示した 80 例)：

- a. 動詞の屈折形式 (形動詞・副動詞) を head として主語をあらわす場合: (11)
- b. 後置詞的要素 (*tula* 「～ために」, *metü* 「～如く」, *esergüü* 「～に対抗して」, etc.) や場所名詞 (*emüne* 「前に・南に」, *ebür* 「南面に」, *qoyina* 「後に・北に」, etc.) を head とする場合: (12)

c. 属格形（とくに物主代名詞）それ自体が名詞句の head となっている場合³: (13)。

(11) *teberi-gü čin-u daba'at olon daba-ba.*

抱く-VN.FUT 2SG-GEN 峰々 多い 越える-PST

「汝のいだける人、嶺々を多く越えたり（上: 35）」[§56. 01:37:10-38:01]

(12) *min-u tula či erüste-ūje'i.*

1SG-GEN ために 2SG:NOM 害を被る-DBT

「我がため、汝、害を蒙らざらめ（上: 72）」[§91. 02:32:04]

(13) *dar-u-n bara-asu tere olja bidanu'ai büi je.*

圧する-E-CVB.MOD 尽きる-CVB.COND その 戦利品 1PL.INCL.PP COP MDL

「圧え終わらば、その戦利品は我等のものなるぞ（上: 186）」[§153. 05:17:06-07]

⇒表 2, 総計：『秘史』モンゴル語では後行型に比べて先行型の出現頻度（12.8%）が低い

⇒ハ・モ語も同様（Yamakoshi2012 のテキスト分析では、ハ・モの D 型頻度は全体の 11.5%。ブ 47.9%、モ 58.5%に比べ D 型の頻度が低い）

Tsunoda (1995: 576) の提案する所有傾斜 (possession cline) にならい、「被所有者」を 7 つのクラスに分類 (I. 身体部位、II. 身体属性、III. 衣服、IV. 親族、V. 愛玩動物⁴、VI. 作品、VII. その他)。ただし VII については、便宜のため独自に下位分類。

「人」のみを指示する 1 人称、2 人称代名詞と、「モノ」も指示しうる 3 人称代名詞とにわけて用例の分布を確認する。

4.1.1 人称・2 人称代名詞

先行型、後行型それぞれで用いられた「被所有者」名詞は付録 2 のとおり。クラス別分布は表 3 のとおり。

表 3.1 人称・2 人称代名詞属格形の階層別使用頻度

	I	II	III	IV	V	VI	VII	計
先行型 (74)	8.1%	13.5%	0%	9.5%	5.4%	0%	63.5%	100%
	(6)	(10)	(0)	(7)	(4)	(0)	(47)	(74)
後行型(296)	12.8%	8.8%	1.7%	42.6%	1.7%	0%	32.4%	100%
(二重型 1 例を含む)	(38)	(26)	(5)	(126)	(5)	(0)	(96)	(296)

(パーセンテージは小数点第 2 位以下を四捨五入して示す。カッコ内は用例数)

³ 物主代名詞は属格形に「～のもの」を示す接尾辞 -ai ~ -ei が接続したものである。普通名詞にこの接尾辞が接続した形式は、『秘史』には表 4 の代名詞を含めて 18 例あるが、1 人称単数物主代名詞 *minu'ai* の 1 例 [§245. 10:34:08] 以外はすべてそれ自体が名詞句の head となっている。他に *bidan-u* に 1 例 [§266. 12:18:04]、head のないケースが確認される。

⁴ Tsunoda (1995: 576) では“pet animal”と定義されているが、ここでは家畜も含める。Nichols (1988: 572) は譲渡不可能的な所有物の例として“domestic animals”をあげている。

先行型よりも後行型のほうが譲渡不可能物に用いられやすい傾向にある。ただし同じ被所有者が情報構造や譲渡可能性に関係なく、先行型で用いられたり、後行型で用いられたりすることもある（韻律が関与している可能性あり）。ハ・モ語のケースとは異なり、明確な使い分けがなされているとはいえない。

4.2.3 人称代名詞（用例は付録3）

3 人称代名詞の特徴：二重型がある／単数・複数とも圧倒的に後行型の用例が多い／人以外を指示する例がある (14)-(16)

(14) qubi-yu'an *quya in-u* delet-čü quburi nambali-s buru-qui-lu'a
淡黄馬-REFL 腿 3SG-GEN 打つ-CVB.IPFV 岡 越える-CVB.MOM 逃げる-VN.FUT-COM

qoyina-ča in-u quba'ula uda'araldu-ba.
後ろ-ABL 3SG-GEN 三人で 追跡しあう-PST

「己が淡黄馬の後腿を打ち、岡を越え逃げ行くや、その後より、三人して、相次いで追跡した（上: 34）」 [§55. 01:35:02-03]

(15) *manaqaši in-u* Tayang#qan-i muqutqa-ju ab-u-bai.

翌日 3SG-GEN PSN#王-ACC 誅する-CVB.IPFV とる-E-PST

「その明るる日、（チンギス罕は）タヤン罕を誅しきった（下: 30）」 [§196. 07:43:05]

(16) *Teb in-u* tende bolqaqda-ba.

PSN 3SG-GEN そこに 審べられる-PST

「たしかにテブはそこに審（しら）べられた（下: 148）」 [§246. 10:43: 03]

表 4.3 人称代名詞属格形の階層別使用頻度

	I	II	III	IV	V	VI	VII	計
先行型	16.6%	16.6%	0%	16.6%	0%	0%	50%	100%
	(1)	(1)	(0)	(1)	(0)	(0)	(3)	(6)
後行型	20.3%	8.7%	2.4%	31.4%	1.0%	0%	36.2%	100%
	(42)	(18)	(5)	(65)	(2)	(0)	(75)	(207)
二重型	19.2%	7.7%	3.8%	38.5%	0%	0%	30.8%	100%
	(5)	(2)	(1)	(10)	(0)	(0)	(8)	(26)

（所有者が人である場合にかぎった、各タイプの分布 [先行型 6例、後行型 207例（総数 222例から「人」以外の所有者 15例を除いたもの）、二重型 26例（総数 35例から「人」以外の所有者 9例を除いたもの）] をそれぞれ 100とした場合の割合。パーセンテージは小数点第2位以下を四捨五入して示す。カッコ内は用例数）

- ・（日時が「所有者」になっている場合・前方照応の場合は別として）二重型は人や動物、無生物が「所有者」となっている場合、譲渡不可能物と読み取れる組み合わせにほぼ限定。

- ・「その他所有物」も、『秘史』中に強さを象徴する武具としてあらわれる qor「矢筒」、「所有者」の配下である irgen「人衆」など、『秘史』の文脈上は譲渡不可能物とも判断できる。

⇒譲渡可能性に関与？

※しかし、3 人称代名詞属格形を伴わない[普通名詞-GEN#身体部位][普通名詞-GEN#親族]といった (17) のような先行型の例は、二重型よりも多く確認される⁵ (普通名詞-GEN が被所有者に後続する例はない)。⇒後置型代名詞属格形が現れるか否かで譲渡可能性が相補的に区別されているわけではない。

(17) bida iču-ju qahan-u mara'a seri'üd-ü-esü basa jiči morila-t
1PL.INCL:NOM 退く-CVB.IPFV 合罕-GEN 肌 冷える-E-CVB.COND 再び さらに 出発する-CNCL

je bida.

MDL 1PL.INCL:NOM

「我等は退きて合罕の肌寒めやらば再びさらに出陣せんぞ 我等 (下: 212)」 [§265. 12:02:07-08]

ただし、「被所有者」が譲渡可能物とみられるケースで二重型があらわれる例がない。

⇒動物が「所有者」となっている場合：二重型はもっぱら身体部位（および馬具が 1 例）が「被所有者」／先行型には身体部位名詞だけでなく tuqul-un#belji'ür (仔牛-GEN#牧草地)「仔牛の牧草地」 [§194.

07:28:02]、morin-u#janda'ul (馬-GEN#乾燥した糞)「馬の乾いた糞」 [§174. 06:17:03] のような例もある

⇒人が「所有者」の場合：jarliq「勅(勅令)」のように先行型でしか「所有者」があらわされていない「被所有者」名詞もある

⇒先行型、後行型は譲渡可能性にかかわらず用いることが可能（これはどの人称でも同じ）／二重型は譲渡不可能な関係に限定して用いられる

※なぜか？

- ・3 人称代名詞 *i / *a は、『秘史』モンゴル語の段階で自立性を失い、その属格形も付属語化しつつある

※主格・具格・奪格が 1 例もあらわれない／属格形も後行型に大きく偏っている

※ただし、[i-nu#被所有者#in-u] という例 (e.g. (3c)) がない＝完全に付属語化しているとはいえない

⇒3 人称代名詞属格形の付属語化がすすむ

⇒あらたに「所有者」を示す属格名詞がおかれる

⇒二重型の発生⇒付属語化した人称代名詞属格形が「余る」

⇒余った属格形に何らかの機能が付与

Nichols (1988: 576) 「従属部標示型（所有者側にマーカーがつく）の言語には譲渡可能性による区別がない／主要部標示型（被所有者側にマーカーがつく）の言語では譲渡可能性の区別がある」

Nichols (ibid.: 578), 津曲 (1992: 277) 「主要部（被所有者）が有標であるか、従属部（所有者）が無標であるほど譲渡不可能」

⁵ 普通名詞属格形が「所有者」となる先行型は 1,109 例確認される。このうち人が「所有者」となっているケース 481 例のうち、「被所有者」に身体部位がくるケースは 86 例 (17.9%)、親族名称が位置するケースは 171 例 (35.6%) がある。割合としても、用例数としても後行型、二重型に比べ少ないとはいえない。

⇒属格形後行型（所有者+マーカ）の自立性がさがり付属語化

（〔被所有者#3SG/PL-GEN〕->〔被所有者=所有者マーカ〕

⇒「従属部標示」から「主要部標示」型化

⇒ここで譲渡可能／不可能を区別する素地ができた？

⇒ハ・モ語はエヴェンキ語（ツングース語族；譲渡可能接辞あり）の影響で、所有人称小詞（＝付属語化した人称代名詞属格形後行型）が譲渡可能性と密接にかかわるようになったのでは？

6. 結論

以上見てきた点をまとめると、『秘史』モンゴル語の人称代名詞属格形の特徴は

- 1) すべての人称において後行型が先行型に比べて優勢である。
- 2) すべての人称において、先行型と後行型とのあいだに譲渡可能性に関する相補的な使いわけは確認できない。
- 3) 1, 2人称においては先行型よりも後行型のほうが譲渡不可能物に対して用いられやすい。ただし先行型であらわすこともできる。
- 4) 普通名詞が所有者として属格形で用いられる場合、3 人称代名詞属格形が被所有者に後行する二重型は、所有者が「人」か「人」以外かにかかわらず、譲渡不可能物に限定して使われる。その反面、先行型は譲渡可能／不可能の区別なく用いられる。

※（相補的に使い分けられている）ハ・モ語とは性質が異なる。

表 5. 『秘史』モンゴル語 (A) とハムニガン・モンゴル語 (B) の所有構造の対比

A. 『秘史』モンゴル語の所有構造と譲渡可能性			
譲渡可能性と有生性との関連	無？（二重型は有生性に関係なく譲渡不可能）		
	先行型	後行型	二重型
頻度	低	高	(3 人称にほぼ限定)
譲渡可能物	◎	○	×
譲渡不可能物	○	○	◎

B. ハムニガン・モンゴル語の所有構造と譲渡可能性			
譲渡可能性と有生性との関連	有（人が所有者の場合のみ譲渡可能性が関与）		
	D 型	H' 型	DH 型
頻度	低	高	高（すべての人称）
譲渡可能物	○	×	×
譲渡不可能物	×	○	○

（◎は○よりも強い傾向があることを示す）

⇒⇒ハムニガン・モンゴル語の所有人称小詞の機能は、中期モンゴル語以降「属格形後行型」が付属語化していく過程で（ハムニガン・）エヴェンキ語の影響を受けて変化・獲得したものではないか。

略号一覧

-. 接辞境界／#: 語境界／=: 接語境界／1, 2, 3: 人称／ABL: 奪格／ACC: 対格／CNCL: 結論／COM: 共同格／COND: 条件／COP: コピュラ／CVB: 副動詞／D: 従属部(所有者)／DAT: 与格／DBT: 疑念／DED: 演繹的／E: 挿入音／EXCL: 除外／FUT: 未来／GEN: 属格／H: 主要部(被所有者)／HBT: 習慣／HON: 敬称／INCL: 包括／IPFV: 不完了／LOC: 位格／MDL: モダリティ／MOD: モーダル／MOM: 瞬間／NEG: 否定／NOM: 主格／OPT: 希求法／PFV: 完了／PL: 複数／PLN: 地名／POSS: 所有者人称／PP: 物主代名詞／PREP: 準備／PRN: 代名詞／PRS: 現在／PSN: 人名／PST: 過去／Q: 疑問／REFL: 再帰／SG: 単数／VN: 形動詞

参考文献

- 服部四郎. 1986. 「蒙古文語の不規則動詞 būkü」 『服部四郎論文集：アルタイ諸言語の研究 II』 pp. 180-201. 東京：三省堂。
 一ノ瀬恵. 1988. 「モンゴル語の人称関係小辞」 『日本モンゴル学会紀要』 19. pp. 15-29.
 İcinose, Megümi. 1988. Mongyul kelen-ü yurban bey_e qamiyatayulqu sula üge-yin kögjl qubiral bolun tegün-i onçuuyi-ber kereglejü baiy_a bayidal-un tuqai. (モンゴル語の人称関係小辞の発展・変化とその特殊用法について) *Öbür mongyul-un yeke suryayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedküil*. (『内蒙古大学学报』) 1988年第3期. pp. 27-53.
 Janhunen, Juha. 1991. *Material on Manchurian Khamnigan Evenki*. Helsinki, The Castrenianum Complex of the University of Helsinki.
 Janhunen, Juha. 2003. Khamnigan Mongolian. In: Juha Janhunen ed. *The Mongolic Languages*. pp. 83-101. London and New York: Routledge.
 亀井孝・河野六郎・千野栄一. eds. 1996. 『言語学大辞典』第6巻; 術語編. 東京: 三省堂.
 風間伸次郎. 2001. 「ツングース諸語における譲渡可能を示す接辞について」 In: 津曲敏郎編. 『環北太平洋の言語』 7. pp. 141-156. 吹田: 大阪学院大学情報学部.
 小林高四郎. 1954. 『元朝秘史の研究』(ユーラシア学会叢刊2) 東京: 日本学術振興会.
 栗林均・確精扎布編. 2001. 『『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』(東北大学東北アジア研究センター叢書4) 仙台: 東北大学東北アジア研究センター.
 Ligeti, Louis ed. 1971. *Historie Secrète des Monogols. (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta I)*. Budapest, Akadémiai Kiadó.
 孟達来. 2009. 「『元朝秘史』モンゴル語音節末子音の漢字表記に関する考察」 『コーパスに基づく言語学教育研究報告』 1. 249-265.
 Nichols, Johanna. 1986. Head-marking and Dependent-marking Grammar. *Language*. 62(1). pp. 56-119.
 ----. 1988. On Alienable and Inalienable Possession. In: William Shipley ed. *In Honor of Mary Haas: From the Haas Festival Conference on Native American Linguistics*. pp. 557-609. Berlin: Mouton de Gruyter.
 小澤重男. 1993. 『元朝秘史蒙古語文法講義』東京: 風間書房.
 ----. 1994. 『元朝秘史』東京: 岩波書店.
 ---- (小沢重男). 1997. 『蒙古語文法講義』東京: 大学書林.
 ----訳. 1997a. 『元朝秘史(上)』東京: 岩波書店.
 ----訳. 1997b. 『元朝秘史(下)』東京: 岩波書店.
 Rybatzki, Volker 2003. Middle Mongol. In Janhunen ed. *The Mongolic Languages*. pp. 57-82. London and New York: Routledge.
 Sunik, O. P. 1947. O Kategorii Otchuzhdaemoi Neotchuzhdaemoi Prinadlezhnosti v Tunguso- manchzhurskix Jazykax. *Izvestija AN SSSR, Otdelenie Literatury i Jazyka*. tom 6/vyp 5: pp. 437-451.
 津曲敏郎 1992. 「所有構造と譲渡可能性：ツングース語と近隣の言語」 In: 宮岡伯人編. 『北の言語：類型と歴史』 pp. 261-278. 東京：三省堂.
 Tsunoda, Tasaku. 1995. Possession Cline in Japanese and Other Languages. In: Hilary Chappell ed. *The Grammar of Inalienability (Empirical Approaches to Language Typology. 14)*. part 2. pp. 565-630. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
 山越康裕. 2010. 「ハムニガン・エヴェンキ語とハムニガン・モンゴル語の所有構造：周辺言語の影響とみられる特徴について」 In: 呉人恵編. 『環北太平洋の言語』 15. pp. 101-116. 富山: 富山大学人文学部.
 Yamakoshi, Yasuhiro 2012. Xamnigan Mongol xelnij ezemshigch ilru'u'lex arga (How to indicate the possessor in Khamnigan Mongolian). In: To'mo'rtogoo et al. (eds.) *Olon Ulsyn Mongolch Erdemtdijn ix xorlyn Iltgelu'u'd (Proceedings of the 10th International Congress of Mongolists). II bor': Mongol xel, Sojolyn tulgamdsan asuudluud (Volume II: Mongolian language and culture and their urgent problems)*. pp. 277-284. Ulaanbaatar: International Association for Mongol Studies.

※本発表は以下の既刊論文に(おおよそ)もとづいています。

- 山越康裕. 2014. 「『元朝秘史』モンゴル語における人称代名詞属格形：ハムニガン・モンゴル語の譲渡可能性との関連から」 In: 北方言語ネットワーク編 『北方言語研究』 4. 65-84.

付録 1. 四部叢刊影印本『元朝秘史』サンプル (第 1 巻, 第 19 節)

[19]

<p>客額周翰<small>說着與了</small> 你只額里牙兀伯亦溫渾<small>一隻行 怎教停住 各折折着 去了</small> 額迭塔奔<small>這五</small></p>	<p>可兀的額<small>子每行</small> 者兒格連撒溫周<small>列 坐着</small> 你只額木速<small>每一隻箭輪 折折恁</small></p>	<p>不古訥台<small>春 一 日</small> 不忽合塔吉<small>不 合 禿 撒 只</small> 字端察兒蒙<small>這五</small></p>	<p>哈卜兒<small>春 一 日</small> 你兀都兒<small>一 日</small> 匡失列篋<small>羊 養着</small> 額迭塔奔<small>這五</small></p>	<p>簡兒子家內獨有馬阿里牙兀家人。 莫不是他生的麼道。說問他母親知覺了。</p>	<p>元秘史一 十一</p>	<p>額客余延額赤捏<small>母 自的 背密 共說 的行</small> 客列都恆宜<small>母 他的</small> 額客阿訥阿蘭豁阿兀恰周<small>覺着</small></p>	<p>馬阿里牙兀古溫備由<small>人有</small> 額迭忽兒班可兀帖兀訥埃備者客延<small>這三 子每 他的 有 麼道</small></p>	<p>字額帖列<small>既</small> 額迭忽兒班可兀帖兀訥埃備者客延<small>這三 子每 生了</small> 格兒朶脫刺<small>家 內</small> 恰察<small>獨</small></p>	<p>額捏額客必答訥<small>這 母 咱每的 兄弟 房親 人無</small> 阿合迭兀恰牙古溫元該<small>丈夫 無</small> 額列兀該為</p>
--	--	--	---	---	--------------------	--	---	---	---

現存する『元朝秘史』には「12 卷本」と「15 卷本」の 2 系統がある。広く伝わっているのはこのうち 12 卷本で、これには「顧広圻本」と「葉德輝本」の 2 種があり、このうちの「顧広圻本」が、中華民国期に古典を収録 (写真撮影) し、編纂した『四部叢刊』に収録されているため、「四部叢刊 (影印) 本」と呼ばれる (孟達来 2009: 250)。15 卷本は明代の『永樂大典』に 12 卷本をもとに再構成して収録されたバージョン。

付録 2. 1 人称・2 人称代名詞属格形とともに用いられる被所有者名詞一覽

先行型 [74]:

- I. 身体部位[6] beye 身体 (5), qo'olai 喉 (1)
- II. 身体属性[10] üge 言葉 (4), setkil 心 (1), amin 命 (1), dawun 声 (1), a'ur#kiling 怒気 (1), aburi 性行 (1), jöb 正しさ (1)
- IV. 親族[7] uruq 親族 (5), nagača 母方親族 (1), ücüget 幼子ら (1)
- V. 愛玩動物 [4] aqtas 驢馬群 (3), qongqor 薄栗毛の馬 (1)
- VII. その他[47] (近い友人等[2]) 人名 (2)
(配下・成員[30]) čerik/čeri'üt 軍/兵士達 (10), kešigten 輪番兵 (10), qara'ul 斥候 (4), manglan 先遣隊 (2), itegelten ina'ut 信頼おく寵臣 (1), a'uru'ut 留守陣 (1), daruqas 首長達 (1), ulus 民人 (1)
(場所[2]) 地名 (1), kilü'ese 聚馬場 (1)
(その他具体物[1]) umda'an#ide'en 飲食物 (1)
(その他抽象名詞[12]) oro 位 (3), buru'u 過失 (3), jarliq 勅 (2), turuq 支え (1), ya'u 何 (1), bolja'an 约会 (1), tusa 功助 (1)

後行型 [295]:

- I. [38] beye 身体 (8), qar 手 (6), ke'eli 肚 (3), če'eji 胸 (3), dotora 身体 (2), gem 鎖骨 (2), güjü'ün 頸 (2), kököl/

- kököt 乳房 (2), burbui 後臚 (1), eber 角 (1), eteri'ün 頭 (1), helige 肝 (1), jirüge 心臓 (1), mariya 肌 (1), nidün 目 (1), ni'ür 顔 (1), ölük#yasun 遺骨 (1), qala'un 女陰 (1)
- II. [25] amin 命 (8), setkil 心 (5), üge/üges 言葉 (3), külük 剛毅さ (2), jewüdün 夢 (1), hači 恨み (1), hünür 香り (1), jöb 正しさ (1), kelen 言葉 (1), nere 名 (1), üyyile おこない (1)
- III. [5] jaqa 襟 (1), jahing 奥襟 (1), buqa'u 枷 (1), buyi 襦袢 (1), qučasun 衣服 (1)
- IV. [126] ečige 父 (48), kö'ün/kö'üt 子/子達 (28), eke 母 (7), de'ü/de'ü#ner 弟/弟達 (7), ökin 娘 (5), uruq 親族 (4), aqa 兄 (3), aqa#de'ü 兄弟 (3), ebüges#ečiges 祖宗の人士 (3), caqa 幼子 (2), abaga 叔父 (2), qadun 妃 (2), ere 夫 (2), eme 妻 (1), egeči 姉 (1), elinčük 曾祖父 (1), borqai 遠き祖先 (1), börte#üji ボルテ夫人 (1), qatun#börte 后ボルテ (1), qasar カサル (チンギス汗の弟) (1), eme#kö'ün 妻子 (1), ere#harat#eme#kö'üt 男ども妻ども (1), kötöčin 家人達 (1)
- V. [5] aqtas 驢馬群 (2), adu'un 馬群 (1), ere#aqta 人馬 (1), noqan 犬 (1)
- VII. [96] (近い友人等[15]) anda 盟友 (7), temüjin/temüjin#anda テムジン/盟友テムジン (6), nökit 友ら (1), qan ハン (1)
- (配下・成員[48]) 人名 (4), ulus 民人 (15), kekte'ül 宿衛兵 (7), dörben#külü'üt 四傑 (3), kešigten 輪番兵 (3), čerik/čeri'üt 軍/軍達 (2), elčin 使者 (2), adu'učin 馬飼い (2), qoničit#quriqačit 羊飼い・子羊飼い (2), qara'ul 斥候 (1), beki#mör 長老 (1), busud 他者 (1), irge#orqo 人衆・散民 (1), gü'ün 人 (1), eme#kö'ün#adu'un#ide'en 女子供・馬群・食糧 (1), irgen#adu'un#ide'en 人衆・馬群・食糧 (1), qali#širi#qatun#eme 財人・貴婦人 (1)
- (その他具体物[18]) bosoqa 闕 (6), ger ゲル (5), e'üten 戸帳 (3), gürdün 車輪 (1), kilgün 轆 (1), qolumta (1), qor 矢筒 (1)
- (その他抽象名詞[15]) tusa/tusas 功助 (8), buru'u 過失 (2), eye 和議 (2), mör 途路 (1), qala 命令 (1), čimar 咎 (1)

二重型 [1]

- II. [1] jewüdün 夢 (1)

付録 3. 3 人称代名詞属格形とともに用いられる被所有者名詞一覧

先行型 [6]:

- I. [1] beye#qad 自ら (1)
- II. [1] üge 言葉 (1)
- IV. [1] uruq 親族 (1)
- VII. [3] qubi 財分 (2), qor 矢筒 (1)

後行型 [222]:

- I. [42] teri'ü 頭 (3), yasun 骨 (4), niru'u 背 (3), qar 手 (4), köl 足 (3), qar#köl 手足 (1), beye 身体 (3), eki(t)~heki 頭 (3), mürü(s) 肩 (2), ni'ür 顔面 (2), čisun 血 (2), elige(t)~helige 肝臓 (2), šibirger 辮髪 (2), aman 口 (1), borbi アキレス腱 (1), doro 下半身 (1), ebče'ü(t) 胸 (1), ebür 懐 (1), güjü'ü(t) 頸 (1), öre 鳩尾 (1), qo'olai 喉 (1)
- II. [18] üge(s) 言葉 (9), ami 命 (2), činar 心性 (1), genü'er 悲しみ (1), oyi 理知 (1), qara'a 姿 (1), setkil 心 (1), gege'en 光 (1), temdek しるし (1)⁶
- III. [5] jaqa(s) 襟 (2), maqalai#büse 帽子・帯 (2), maqalai 帽子 (1)
- IV. [65] kö'ün/kö'üt 子/子達 (23), öki(t) 娘/娘達 (3), aqa 兄 (9), de'ü 弟 (4), ečige 父 (3), eke 母 (4), eme 妻 (6), eme#kö'ün 妻子 (2), ere 夫 (2), gergei 妻 (2), angqa ike 長兄 (1), berinet#öküt 嫁達・娘達 (1), ečige#eke 父母 (1), egečimet 姉 (1), eke#de'ü#ner 母・弟達 (1), naqaču#nar 母方親族達 (1), uruq 親族 (1)
- V. [2] aqta 驢馬 (1), hūker 牛 (1)
- VII. [75] (近い友人等 [3]) nökit 僚友達 (1), qan ハン(2)
- (配下・成員 [29]) adu'uči 馬飼い (1), balaqat#irge 城塞・人衆 (1), čeri'üt 兵士達 (1), elči 使者 (1), irge#orqa 人衆・散民 (2), irgen 人衆 (7), ulus 民人 (7), ken 誰 (1), kešikten 輪番兵 (2), noyan 長

⁶ gege'en 「光」、temdek 「しるし」の2例の所有者は、「白黄色の人 (上: 20)」という神格化された存在であり、厳密には人間とはいいがたいが、擬人化している例ととらえる。

- 官 (1), qara'ul 哨兵/斥候 (2), qol 本隊 (2), tariyajin 農民達 (1)
 (その他具体物 [25]) ači'a 荷 (1), adu'un 馬群 (1), adu'u#ordo#ger 馬群・宮居 (1), altan mönggün a'urasun tabar alašas se'üses 金銀、絹布、財物、馬匹、小使達 (1), balaqat 城塞 (2), bari'as 枷 (1), belge 割符 (1), buqa'u 枷 (1), e'ede 門框 (3), eme'el 鞍 (1), ger/ordo#ger ゲル/宮居 (3), ger#tergen ゲル・車 (1), hoi 森 (1), jantawu 盃 (2), ölegei#könjile 揺籃・衾 (1), qor 矢筒 (1), qorqan 砦 (1), tariyat 種つもの (1), tergen 車 (1)
 (その他抽象名詞 [18]) aburi 内実 (1), adarqan 譏り (1), eye 和議 (1), mör 跡/道 (2), oro 居所 (1), qari'u 返答 (2), qa'uluqa 路 (2), qurim 宴 (1), sayid 善きもの (1), šilta'an 故 (1), södürgen そそのかし (1), tusa 功助 (1), üyyile おこない (1), ya'u 何 (1), yosun 理 (1)

※非人間所有者[14]

動物[7]:

- I. [6] arasun (獣の) 皮 (1), qa (獣の) 前足 (1), abit (三歳鹿の) 小肋骨 (1), qabirqas (三歳鹿の) 肋骨 (1), quya (獣の) 腿 (1)/ (淡黄馬の) 腿 (1)
 III. [1] inggirčaq (その馬の) 荷鞍 (1)
 無生物[1] čü'ü (車の) 轆 (1)
 場所[2] ebesün (かの地の) 草 (1), görü'en (かの地の) 獣 (1)
 日時[4] manaqari/manaqaši (その日の) 翌日 (2), namur (その年の) 秋 (2)

※前方照応[1] Teb (くだんの) テブ (1)

二重型 [35]

- I. [5] teri'ü 頭 (2), bökse 尻 (1), jürüge 心臓 (1), niru'u 背 (1)
 II. [2] ami 命 (1), üge 言葉 (1)
 III. [1] jaqa 襟 (1)
 IV. [10] kö'ün/kö'üt 子/子達 (6), aqa#nar 兄達 (1), eme#kö'ün 妻子 (1), ökit 娘達 (1), qatut 妃達 (1)
 VII. [8] irgen 人衆 (1), erüge 天窓 (1), qor 矢筒 (1), tergen 車 (1), tusa 功助 (4)

※非人間所有者[9]

動物[6]:

- I. [6] quya (獣の) 腿 (1)/ (淡黄馬の) 腿 (1)/ (三歳鹿の) 腿 (1), aman#niru'u (口白の黄馬の) 頸骨 (1), ke'eli (獣の) 肚 (1), ödön#hüsün (雁や鴨の) 羽毛 (1)
 無生物[2] kimul (十指の) 爪 (1)/ (五指の) 爪 (1)
 場所[1] altan mönggün et a'urasun ya'u (中都⁷の) 金銀、財物、布帛などくさぐさの物品 (1)

⁷ 現在の北京をさす (小澤訳 1997b: 194)。